

第一夜

こんな夢を見た。

「私が死んだら、殺して下さい」

月の降る晩のことだった。

葉の一枚さえも残らない寒木に寄り添いながら、細い声を震わせ女が云った。縋るように木の幹に肩を寄せる姿は剩りに自然で、だから女はきつと死ぬのだろうと思つた。女は、まだ少女の盛りを過ぎないだろう華奢な体軀と裏腹に、如何程の苦難の中で生きてきたのかを覗わせる風格が同居していた。四辺あたには寄り掛かる樹の他に星夜を遮るものもなく、四方の山々が新緑に萌える生命で満ちているというのに、この女の附近だけが、時を止めたように固い土に覆われ、荒廃の限りを顕していた。

どうか殺して下さいと懇願する貌はひどく寡れ、流す涙も失うほど沈痛な面差を真っ直ぐ私に向けている。土気色の肌に死相を思わせないのは、ただ其処だけが輝き燃える双眸が、内燃する意思を顕しているせいだろうか。

きつと自分が手を掛けずとも、そのうち自ずと燃え尽きるであろう。それはあまりにも惜しいと、多分そのときの自分は思った。

出来ることならば、今すぐに楽にして遣りたい。それが嘘偽りの無い自分の本心だった。だというのに、自分は己が宿命を忘れることができない。後にも先にも、これ程に忸怩たる思いを抱いたことはない。

自分は、願いを叶えてやろうと悟ったばかりに、失われるものの美しさに向き合うために囚われた。滅びの美学に纏われて、彼女を取り巻く全てが彩りを増していく。機を待っていたような風が吹き、踊るように百花を運んできた。

絢爛たる花の雨が上がると、後には骸のような裸木と、その元に横たわる女の亡骸だけが残された。物言わぬ身と成った抜け殻は、ただ一筋の涙を流しながら、なおも優しく微笑んでいた。それで自分は永久に願いを果たす機会を失った。

この樹はやがて真つ赤な花を咲かせるだろう。翌年もまた翌年も、命の証のような紅を纏って咲き誇るだろう。

その寒緋色の花びらが再び白く染まるまで、自分は春の虜だろう。